様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３１６３

研究課題名（和文）軍事遺跡の教育・学習資源化をめぐる実践的研究

研究課題名（英文）Doing history and doing archaeology on military sites: a practical study on the Imperial Japanese Navy sites as educational and learning resources

研究代表者
安藤　広道（Ando, Hiromichi）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：８０３１１１５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、慶應義塾大学日吉キャンパス一帯に存在する帝国海軍軍事遺跡を中心に、鹿児島県鹿屋市第五航空艦隊司令部関連遺跡、神奈川県座間市高座海軍工廠関連遺跡などの考古学的調査を行い、併せて、それぞれの地域の方々にご協力いただきながら、遺跡に関わる文献調査や聞き取り調査の成果を収集した。これらの調査と並行して、調査の成果に基づく、研究会、講演会、遺跡の見学会、ワークショップ等を実施し、地域の方々とともに、軍事遺跡の教育・学習資源としての価値、軍事遺跡の研究の進め方についての議論を行った。最後に研究の成果を『慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究Ⅱ』にまとめて刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は大きくふたつある。ひとつはアジア太平洋戦争末期の軍事遺跡の考古学的・歴史学的調査の成果であり、特に地下壕の調査方法をめぐっては、今後の指針のようなものを提示できたと考えている。ふたつめは、こうした考古学的・歴史学的調査の成果の意味を、公共考古学的実践を通して検討し得たことである。この点は本研究の成果の社会的意義とも重なっており、学術的世界を超えて多様な立場からのさまざまな歴史が語られている公共的世界において、遺跡という場が、歴史を語る者同士を結び付け、対話を促す結節点になる可能性を示し得た点は、大きな成果になったと考えている。

研究成果の概要（英文）：In this study, I had conducted archaeological researches on the Imperial Navy military sites on and around the Keio University Hiyoshi Campus, as well as the sites related to the 5th Air Fleet Command Headquarters in Kanoya City, Kagoshima Prefecture and the Koza Navy Arsenal in Zama City, Kanagawa Prefecture. At the same time, I asked the local residents in each region to cooperate to my study and had collected the results of historical materials and oral history documents related to the sites. Concurrently I had held study meetings, lectures, tours of the sites, and workshops based on the results of the researches, and together with local residents, discussed the value of military sites as educational and learning resources, and how to proceed with research on military sites. Finally, the results of the study were published together in “Study on the War Sites on and around the Keio University Hiyoshi Campus, II”.

研究分野：考古学

キーワード：近現代考古学　戦争遺跡　軍事遺跡　帝国海軍　地下壕　公共考古学　教育資源　学習資源

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

アジア太平洋戦争の体験者が少なくなるなか、近年、人に代わる戦争の記憶や歴史を継承する媒介として、戦争遺跡への関心が高まっている。この動向の主体はいわゆる市民や自治体であり、そこでは「人からモノへ」というフレーズのもと、戦争遺跡を保存し、教育・学習資源として活用する必要性が強調されてきた。そうしたなか、社会学などの一部の学問分野において、戦争遺跡を対象とした研究に進展がみられるようになってはきたものの、本丸とも言うべき考古学や歴史学の分野では、必ずしも戦争遺跡への関心は高まっておらず、公共的世界における動向に、学問としてコミットメントできていない状態が続いていた。戦争遺跡を媒介とする記憶や歴史の継承には、体験者による語りを軸とした取り組みとは全く異なる方法が求められるのは当然である。公共的世界の動向に応え、その方法を確立していくには、考古学や歴史学における、遺跡を対象とした調査・研究成果の蓄積と、それらの成果とさまざまな記憶や歴史を接続させていくための、理論・実践双方にまたがる公共考古学的研究が急務である。

２．研究の目的

本研究は、こうした考古学や歴史学における戦争遺跡研究の現状に鑑み、慶應義塾大学日吉キャンパス内の連合艦隊司令部地下壕をはじめとする、旧帝国海軍の軍事施設（軍事遺跡）の考古学的・歴史学的調査を実施し、それらの調査成果を用いた公共考古学的実践を通じて、戦争遺跡の考古学的・歴史学的な調査・研究成果の蓄積をはかるとともに、戦争遺跡の教育・学習資源化における考古学的・歴史学的調査・研究の意義を明らかにすることを目的とした。

従来の考古学や歴史学では、遺跡を、研究者の構築した歴史を伝達（還元）する場と見なす傾向が強く、そこでは多くの場合、研究者以外の人々は受動的な立場に置かれてきた。しかし本研究では、遺跡と記憶・歴史を結び付けていくためには、個々人の能動的な働きかけが不可欠と考え、遺跡をそうした一方通行的な関係が支配する場ではなく、研究者を含む誰もが、そこを媒介として多様な歴史に触れ、対話を通じて歴史との向き合い方を学ぶ場と位置付けることを試みた。そうした対話のネットワークのなかに、戦争遺跡の考古学的・歴史学的な調査・研究の成果を組み込むことで、遺跡に関わる多くの人々が、それらの調査・研究成果を利用しながら、自身の知識や経験を接続させ、主体的に記憶や歴史の継承に加わることのできる場の構築を目指すことにした。

３．研究の方法

本研究は３年計画で実施した。方法的には、軍事遺跡の考古学的・歴史学的な調査・研究と、その成果を用いた公共考古学的実践の大きく二つのブランチに分かれるが、両者は一部重なり合っている。

(1)前者では、慶應義塾大学日吉キャンパス内の連合艦隊司令部地下壕をはじめとする、旧帝国海軍の軍事遺跡を対象とした調査を実施した。申請当初の計画では、東京湾沿岸地域の遺跡を集中的に調査する予定であったが、初年度に、大戦末期の航空特攻作戦において連合艦隊司令部と密接な関係にあった鹿児島県鹿屋市の第五航空艦隊司令部地下壕の調査が可能になったため、その調査に多くの時間と労力を割くことにした。他にも大戦末期に局地戦闘機雷電の生産を行っていた神奈川県座間市高座海軍工廠芹沢地下壕をはじめ、横須賀市横須賀鎮守府・海軍工廠地下壕群、逗子市横須賀海軍軍需部池子火薬倉庫地下壕群、熊本県錦町人吉航空基地関係地下壕群など、帝国海軍関係の複数の地下壕の予備的調査も実施した。

調査・研究の過程で、本研究で対象とした地下壕のような遺跡の調査では、360°カメラを用いた映像・画像が、遺跡の研究用の記録としてはもちろんのこと、成果公開の手段としてもきわめて有効であることが明らかになってきた。そのため、簡易型の撮影セットを開発し、比較的容易に地下壕内の記録を取ることができるようにした。

こうした遺跡の考古学的調査と並行して、それぞれの遺跡に関わる文献史料調査、写真資料の収集、聞き取り調査の成果等の集成も進めることにした。この調査は、それぞれの地域の方々に参加していただきながら実施したため、この調査自体が、公共考古学的実践としての側面をもつことになった。

(2)後者の公共考古学的実践では、上記の地域の方々との調査に加え、遺跡の考古学的調査の成果を、自治体や市民団体などと共有したうえで、共同で研究会、講演会、遺跡の見学会、ワークショップを開催してきた。講演は、一方的に演者が話すのではなく、聴衆との対話の時間を長くとる、対話型とも言うべき方法で行った。私の発表や講演では、考古学的調査成果の提示と、公共考古学の方法論的な解説に主眼を置き、歴史の構築主体があくまでも個々人であることを強調することに努めた。

また、360°カメラによる画像、映像も多用し、VR バイザーを用いた没入体験のデモやワークショップも開催した。

(3)研究期間の最終年度に、上記の調査・研究の成果をまとめた研究成果報告書を刊行し、全国の大学、研究機関、自治体教育委員会等に配布した。

４．研究成果

本研究の成果は多岐に渡る。

(1)軍事遺跡の考古学的・歴史学的調査の成果としては、以下の点が挙げられる。

慶應義塾大学日吉キャンパス内の連合艦隊司令部地下壕と、鹿屋市第五航空艦隊司令部地下壕では、その構築や使用に関わる痕跡の悉皆的な調査を実施した。その結果、地下壕構築の方法や技術、照明や電線、上水などの配置状況や、地点ごとの機能などに関わる、多くの新知見を得ることができた。座間市高座海軍工廠芹沢地下壕でも、予備的なものではあるが、やはり同様の観点からの調査を行い、こちらでも多くの知見を得ることができた。

また、いずれの調査でも、記録には 360°カメラを多用することにし、調査期間を通じて、4000 枚以上の画像と 200 本以上の動画を撮影した。これらは、地下壕の研究用データとしてのみならず、通常入坑が制限される地下壕内の様子を広く公開するためのデータとしても大きな意味をもつものである。

それぞれの遺跡に関係する、文献史料や聞き取り調査の成果、写真等の収集では、それぞれの地域の方々に協力していただきながら、多数の情報を入手することができた。この調査を通じ、文献史料や聞き取り、当時の写真などの収集には、やはり地域の方々の主体的な取り組みが不可欠であること、そして、そうした主体的な取り組みと、考古学的な調査・研究の成果を接続させていくことが、公共考古学的実践のひとつの有効な方法であることが明らかになってきた。

本研究では、こうした一連の地下壕の調査を通じ、地下壕という軍事遺跡の調査方法をめぐる、ひとつのモデルを提示することができたと考えている。

(2)本研究では、調査成果の公開、及び公共考古学的実践として、期間内に研究会 17 回、講演 18 回、遺跡見学会 23 回、デモ・ワークショップ 6 回を実施した。いずれの取り組みにおいても、歴史を一方的に伝えるのではなく、考古学的・歴史学的調査の成果と、地域の方々の聞き取りや写真の調査などの成果を接続させつつ、多くの人たちが主体的に参加できるようなかたちをとることに努めた。研究会と講演会では、参加者と、軍事遺跡を教育・学習資源としてどのように活用していくのかという点をめぐる議論も行った。

こうした試みの評価については、研究を進めるなかで、短い研究期間で結論を出すことは困難と考えるようになったが、考古学的調査の成果を用いた公共考古学的実践の一つのモデルを提示することはできたのではないかと考えている。

(3)最終年度に『慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究Ⅱ』と題する報告書（A4 版 132 頁、本文モノクロ、写真図版カラー）を刊行した。この報告書には、戦争遺跡の公共考古学的研究をめぐる理論的整理と本研究の成果をまとめたうえで、講演録 5 本、及び連合艦隊司令部地下壕と第五航空艦隊司令部地下壕を中心とする考古学的調査の成果を掲載した。なお、本報告書は 600 部印刷し、全国の大学、研究機関、博物館、埋蔵文化財センター、自治体の教育委員会等に配布した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 安藤広道	４．巻 第64巻第１号
２．論文標題 慶應義塾日吉キャンパス一帯の戦争遺跡群	５．発行年 2017年
３．雑誌名 考古学研究	６．最初と最後の頁 13-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安藤広道	４．巻 第４号
２．論文標題 文化財の可能性とは？－デジタル技術への期待－	５．発行年 2017年
３．雑誌名 慶應義塾大学DMC紀要	６．最初と最後の頁 12‐18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安藤広道	４．巻 第23号
２．論文標題 近現代考古学の可能性	５．発行年 2020年
３．雑誌名 経済史研究	６．最初と最後の頁 33-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計4件

１．著者名 斎藤あや・安藤広道・石川日出志・佐々木由香・古屋紀之	４．発行年 2017年
２．出版社 大田区立郷土博物館	５．総ページ数 182
３．書名 土器からみた大田区の弥生時代―久ヶ原遺跡発見90年―	

1．著者名 高橋健・安藤広道・石川日出志・小倉淳一	4．発行年 2017年
2．出版社 横浜市歴史博物館	5．総ページ数 120
3．書名 よこはまに稲作がやってきた	

1．著者名 安藤広道・岡本孝之・遠部慎・小林謙一・坂本稔・佐藤孝雄・千葉毅・藤山龍造・吉永亜希子	4．発行年 2019年
2．出版社 慶應義塾大学民族学考古学研究室	5．総ページ数 291
3．書名 日吉台遺跡群発掘調査報告書	

1．著者名 安藤広道	4．発行年 2020年
2．出版社 慶應義塾大学民族学考古学研究室	5．総ページ数 132
3．書名 慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究Ⅱ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	千葉　毅 (Chiba Tsuyoshi) (70589845)	神奈川県立歴史博物館・学芸部・学芸員 (82702)	
研究協力者	石森　光 (Ishimori Hikaru)	株式会社　中野技術・調査士補	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	高橋　鵬成 (Takahashi Tomonari)	礼文町教育委員会	